

# 輪島連携プロジェクト概要

---

松村恵里

(金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター)

## 地域提案型課題への取り組み — 輪島連携プロジェクト

松村恵里

(金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター)

### 1、はじめに

なぜ、今、輪島塗を使って「どのように感じるか」「どのように感じてきたか」をテーマとしたのか。それは、輪島塗に携わる者にとって、あまりに身近であったために見過ごされてきた視点であり、現代社会の中で輪島塗を再考しようとするにあたり、生産地の内部から起こってきた疑問であった。

輪島塗は単なる文化資源というだけでなく地元で生きる人々にとってのプライドでもある。ゆえに、輪島塗市場の活性化は、未来にむけた地域活性化につながる。輪島塗を対象としたプロジェクトのテーマとしては、デザイン開発のような華々しさはないかもしれない。しかし、これまで輪島塗の強みと考えられていた部分をもう一度見直し、生産地の人々が「あたり前」として気づいてこなかった部分を掘り起こすことは、経済的効果以上に、作り手、売り手の気持ちにも影響を及ぼすのではないか。我々にとっては難解な課題であったが、未来に向けた新しい輪島塗の方向性を求めて、暗中模索の中でこの小さなプロジェクトは始まったのである(図1)。

輪島塗は早くに日本のナショナルな工芸として注目され、その技術・デザインの成熟度が高く、今回の調査によってもその認知度の高さを知ることができた。しかし、輪島塗業界における、1992年以降の経済的低迷に伴う売り上げの減少という「窮状」は、生産現場に大きな打撃を与えることとなった。そのため、作り手、売り手による自助努力が欠かせなくなり、市場改善のために、これまででも有名デザイナーとのコラボレーションなどによってデザイン開発も行



図1：輪島塗販売店（キリモトショップ）における調査

われてきた。しかし、それら新しいモノの開発は市場の一部や一時的な刺激にはなっても、輪島塗業界全体として、持続的でより広い市場の活性化につながってきたとは言い難かった。

輪島塗市場の活性化には、まずは人々に輪島塗を伝えなければならない。しかし、輪島塗という名前は知られていても、手に取ってもらうまでには至らないということが、過去25年ほどの間、生産現場が抱えてきた課題であった。そのような輪島塗業界に活気を取り戻すため、輪島塗生産者たちがあたり前のように感じてきた輪島塗の「良さ」を再検討し、それを誰に、どのように伝えてゆくかという根本的課題への取り組みの必要性が、生産者の一部でも考えられるようになった。しかし、このような課題を分析・考察してゆくには、量的調査以上に質的調査が必要となり、そのための知識やスキルも必要となる。そのような経済的、時間的余裕を、生産者側に求めることは難しく、課題解決のための知識とスキルを有する生産現場外部との協働体制が不可欠となっていた。

本プロジェクトは、以上のような生産現場から求められている明確な課題に対し、人文系の学生たちが、輪島塗に対して人々がどのように感じているかという点に関しては感性工学手法を、また、得られた結果を誰に届けるかという点に関してはマーケティング手法を学びながら、2年間に渡り地域提案型の課題に産学官連携で取り組んだものである。

## 2、地域からの提案課題への取り組み

輪島塗はその確かな技術と歴史的な追い風の中で確実に認知度を高めてきた。また、前述したような景気後退後も、輪島市は輪島塗の高い技術などの「知識」の部分を中心に特徴として打ち出し、販売促進につなげる事業を実施し、自助努力を続けている一部企業・工房もさまざまな戦略をたてながら、販路開拓を目指したデザイン開発等に取り組む業績も上げている。しかし、輪島塗産業全体としての成果が上がっているとはいえ、抜本的な原因も不明瞭なままであった。そこで、生産者側の「あたり前」を見直し、輪島塗の「良さ」が伝わっていないのではないか、では、その「良さ」とは何であるかという、根本的課題に取り組む必要があると考えてこられた中心人物が、今回のプロジェクト共同参加者である桐本氏であった（図2）。

輪島塗の難しさは、デザイン性だけでは競合する他産地の漆器や合成樹脂製品との差別化がなかなか測れないところにある。なぜなら、陶器やガラス、木製品と異なり、漆器は「見た目」だけではその違いを判断するのが難しいからである。であるならば、天然木に本物の漆を塗り込んだ輪島塗を使ってどのように感じるか、感じてきたかという「感性」の部分に取り組むべきなのではないか、それこそが潜在的な「良さ」を見つけ出し、顧客に強く訴えられる部分なのではないか、というのが、幼いころから輪島塗を使用してきた桐本氏の着眼点であった。しかし、取り組むには調査・分析のための時間と経費を生産者側が被るといった難点があり、さらに、人の「感性」を調査し、可視化するという極めて難しい問題にも直面しなければならなかった。そのような状況の中で、文化資源マネー



図2：桐本泰一氏、順子氏との合同ミーティング



図3：輪島市での研修

ジャー養成プログラムにおいて地域の文化資源の活性化を目指して始まったのが、「輪島連携プロジェクト」であった（図3）。

## 3、輪島連携プロジェクトを通して

プロジェクトの参加者の総数は40名で、内訳は日本人学生12名、留学生18名、教員（金沢大学）5名、教員（外部）2名、輪島市パートナー3名である。その他、輪島塗の歴史など基礎知識に関わる特別講師も招聘した（図4、5、6）。手法としては、人文学を学ぶ学生たちが自身の知識や調査スキルを生かしながら、アンケートや聞き取りによる人々の「語り（narrative）」を中心とした調査を実施した。また同時に、調査結果の分析のために「感性工学」を取り入れ、さらに、マーケティングプロセスモデルを設定し、潜在顧客を推定してゆくため「マーケティング」手法を学ぶことにより、生産者側が抱えてきた地域提案型課題を検討した。それにより、将来、地域自体が調査結果を生かしてゆけるよ





図4：システム・マネジメント講義におけるワークショップ



図5：「輪島塗の価値を探る」



図6：輪島塗歴史講義

う、知識を還元することを目指した。

これまでの調査からは、輪島塗は「使ってもらおうと、リピート率が高まる」こと、さらに、プロジェクト開始当初注目していた「触る」という行為以上に、「口元に触れる」行為が重要であることも明らかとなってきた。すなわち、

潜在顧客の開拓のためには、輪島塗に触ってもらうと同時に、口元まで運ぶ行為にまで誘発することが大きなポイントとなり、一度日常使いのモノとして使用され始めると、持続的な顕在顧客獲得につながってゆく可能性が高いと推測される。しかし、この行為にまで及ぶには「触れない」状態で、輪島塗の魅力の人々に訴えかける仕掛けが必要となり、その部分をサポートしてゆけるのが、本プロジェクトで学生たちが導き出した人々の言葉である。

このようなモノと顧客をつなぐものとして言葉が注目されているのは、決して輪島塗だけではない。

2017年11月27日の新聞記事 [1] には、「100年後の工芸のために普及啓発実行委員会」からの3つの提言が掲載された。

- ◇工芸の魅力『伝える』技術を磨くこと
- ◇工芸の良さ『体感』できる機会を増やすこと
- ◇枯渇が懸念される素材や道具を確保すること

このうち、「伝える」という点では、

- ・工芸の特徴や技術を分かりやすい言葉で語る
- ・翻訳の共通ルール作りを急ぐこと
- ・地域固有の文化を語ることができ、つくり手の立場を代弁して価値を案内できる人材の育成を進める

ことが、挙げられている。

すなわち、やはり求められているものは、「言葉」「語り（物語）」なのである。なぜなら、写真やネット上の「見た目」だけでは、その良さが伝わりにくいモノにとって、言葉が人とモノの間を媒介する重要な役割を果たすからである。

本プロジェクトでは、学生たちの調査結果の分析と市場活性化に向けた提案が主となり、その提案を実際の市場へ実験的に届け、さらなる課題を暴き出し、市場活性化に向けて再検討を行うというまでには至っていない。この点は、大いに反省点として残るが、市場開拓にデザイン開発を数多く実施してきた輪島塗生産者側が、長年取り組めなかった「輪島塗を使って、

人がどう感じるか」という課題に取り組み、その分析結果を還元する点で、一つの問題解決を試みているといえる。また、この結果を誰に向けてどのように発信してゆくかという点も生産者が抱えてきた課題であったが、その点は顕在顧客の明確化と潜在顧客の推定、および、発信に関するアイデア提案を行い、生産者側からの市場に向けた製品アピールに役立てていただくことになっている。

プロジェクト開始当初は、我々も輪島塗に対しては、高級で近寄りがたい印象を持っていた。しかし、生産者の方々の熱のこもった「語り」を聞き、実際に使ってみる中で、そのイメージは姿を変えてゆくこととなった。良さが伝わり、使ってもらえれば、さらにファンを増やせるのは、そのモノの質が高いからであり、輪島塗はその可能性を大いに秘めているのである。そのようなモノの良さを伝えることに、今回の学生たちの調査結果が繋がり、今後の輪島塗市場活性化に少しでも貢献することができることを、心より願う次第である。

- (1) 『北國新聞』2017.11.27日刊, 第44826号,  
石川県版, 1面

【メンバー一覧】(敬称略)

◆参画者：▶ 金沢大学内部参画者

- ・文化資源マネージャー養成プログラム所属学生
- ・文化資源マネージャー養成プログラム特任教員

特任教授：山形真理子(現岡山理科大学教授)

特任准教授：秦小麗

特任准教授：吉田泰幸

特任助教：田村うらら

特任助教：松村恵里

- ・先端科学イノベーション推進機構：鳥谷真佐子

(現慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究科 特任講師)

◆参画者：▶ 金沢大学外部参画者

- ・北陸先端科学技術大学院大学名誉教授：中森義輝
- ・輪島塗製作会社「輪島キリモト」(桐本泰一、桐本順子)
- ・輪島市役所産業部漆器商工課(細川英邦)

## 【講義等概要】

2016/ 5/11	Lecture: “Kansei Data Analysis-But computing with Word- 1. Bipolar Evaluation Measures” by Prof. Yoshiteru Nakamori
2016/ 5/18	Lecture: “Kansei Data Analysis-But computing with Word- 2. Approach to Design Support” by Prof. Yoshiteru Nakamori
2016/ 5/25	Lecture: “Kansei Data Analysis-But computing with Word- 3. Product Recommendation” by Prof. Yoshiteru Nakamori
2016/ 7/12	Lecture: “Knowledge Management using Kansei Data Analysis” by Prof. Yoshiteru Nakamori
2016/ 6/ 3	Lecture: “Sensory Inspection and Kansei Engineering” by Koetsu Yamazaki as the president of Kanazawa University
2016/ 6/22	Joint meeting with Mr. Taichi Kirimoto and Ms. Junko Kirimoto
2016/ 7/ 6	The meeting to request the budget advised by Prof. Masako Toriya
2016/ 7/29	The special lecture on marketing theory and system management theory 1 by Prof.Masako Toriya
2016/10/31	The preliminary research in Wajima city as Cultural resource studies internship
2016/12/ 5	The special lecture on marketing theory and system management theory 2 by Prof. Masako Toriya
2017/ 3/14	Lecture: “How to educate innovators” in Kyoto Institute of Technology by Päivi Oinonen (Design Factory Global Network Strategist, Aalto University)
2017/ 3/15 -16	KYOTO Design Lab Innovation Culture Workshop in Kyoto Institute of Technology by Päivi Oinonen (Design Factory Global Network Strategist, Aalto University) by Kasper Suomalainen (Director of Community, Start up Sauna)
2017/ 5/23	Lecture: “A whole concept of the wajimanuri project” by Prof. Masako Toriya
2017/ 6/30	Midterm presentation by group A,B,C
2017/ 8/8-9	Field trip in Wajima city as Cultural resource studies internship
2017/12/18	Lecture: “The Value Proposition Canvas” by Prof. Masako Toriya
2017/ 6/28	Lecture on the history of Wajima nuri1 by Mr. Minoru Omukai*
2017/ 8/ 7	Lecture on the history of Wajima nuri2 by Mr. Minoru Omukai*
2017/ 1/19	Presentation on summary by group A,B,C

※元輪島漆器商工業協同組合常務理事